産後の母親に対する継続ケアの取り組みに関する報告　第Ⅱ報

医療法人真田産婦人科麻酔科クリニック
○堀井二三代　内川加代子　酒井 康子　宮地シヅ子
津原冨久恵　永江　里美　鄭　香苗　井上　尚美
高柳　典子　真田九州男　平川万紀子　平川 俊夫
産業医科大学産業保健学部　福澤　雪子
佐賀大医学部看護学科　山川　裕子

当院では，産後の心身両面からのケアの充実を目指して種々のアプローチ方法により退院後のケアに取り組んでいる。先行研究で退院時にEPDSを行うことで高危険群を早期に抽出できることが明らかになったので、今回はこの高危険群に対して2005年より導入したケアシートを用いた早期介入状況と有用性を導入前の2004年と比較検討した。

研究方法：2004年と2005年に当院で出産した母親について退院時と1か月時のEPDSを調査し高得点群(9点以上)と低得点群(8点以下)に分け、それぞれケアの実施状況をケアシート等より分析した。退院時調査票に自由記載欄を設けて、記載内容とEPDSとの関係を分析した。データは個人名が特定されないよう配慮した。

結果:対象1221名.導入前614名,EPDSはA群(退院時高得点+1か月時高得点)19名(3.1%)、B群(退院時高得点+1か月時低得点)60名(9.8%)、C群(退院時低得点+1か月時高得点)5名(0.8%)、D群(退院時低得点+1か月時低得点)530名(86.3%)。導入後607名,EPDSはA群16名(2.6%)、B群46名(7.6%)、C群22名(3.6%)、D群523名(86.2%) であった。導入後はC群の出現が多く、1か月時のEPDS得点も有意に高くなった。継続ケアの実施率は導入前(84.5%・ABC群94%)導入後(97.4%・ABC群100%)と改善し2・3種類の組み合わせケアも増加した。235名が自由記載欄に記入し、その内訳は退院時高得点者の48.4%、退院時低得点者の37.6%であった。退院時高得点者では、抑うつ状態・身体症状・育児不安・家庭の問題などの自由記述が高率であった。

考察：ケアシート導入後の方が、1か月時のEPDS得点が高くなっていたが、退院時は低得点で1か月時に高得点になるC群が多かったためだと考えられ、C群への対応が課題である。導入後、継続ケアの実施率が高まった。これはケアシートの活用により、母親の状況を把握しやすくなったことと、スタッフの意識向上による効果だと思われる。2種類・3種類の組み合わせケアの増加は退院時・電話訪問での働きかけの効果や母親のニーズの現れでもあると推測できる。退院時EPDS高得点者については全員継続ケアが実施できたが、今後も1か月時高得点者へのフォローが必要である。自由記載については、EPDS高得点者は精神面に関する記載が多く見られ、内容を把握したうえで継続ケアにつなぐ必要がある。

結論：ケアシートの活用は実施状況の改善には有用である。しかし実施率上昇・組み合わせの継続ケアの増加もEPDS得点の低下にはつながらなかった。今後は、ケアシートの項目を見直し、身体症状・育児不安・家庭の問題など焦点を絞った項目を設けて、継続ケアに生かすことが大切である。C群になるかもしれない母親への1か月を待たずに、きめ細かいアプローチが必要である。